

ラタナキリ州の先住民（フォト・エッセイ）

著者	初鹿野 直美
権利	Copyrights 日本貿易振興機構（ジェトロ）アジア 経済研究所 / Institute of Developing Economies, Japan External Trade Organization (IDE-JETRO) http://www.ide.go.jp
雑誌名	アジ研ワールド・トレンド
巻	172
ページ	49-52
発行年	2010-01
出版者	日本貿易振興機構アジア経済研究所
URL	http://hdl.handle.net/2344/00004607

■ フォト・エッセイ ■

カンボジア ラタナキリ州の先住民

写真・文

初鹿野直美

Naomi Hatsukano



バンルンの北方に向かう赤土の道

「カンボジアの山奥に、イケメンがたくさんいる村があるのよ！」そんな知人の旅の思い出話にひきつけられたわけではないが、好奇心にかられた私は、急遽、その年のゴールデンウィークをカンボジア・ラタナキリ州で過ごすことにした。日本からバンコク経由でプノンペンに入り、そこからバスで丸一日かけてストウントラエンに至る。翌朝、乗り合いタクシーで三時間走ると、ラタナキリ州の州都バンルンにたどりつく。そして、バイクで三時間、船で一時間川をのぼったところに、ようやくその村があった。トンブオン族の村である。

しかし、なんということであろう。雨季の五月は、男衆はみんな農作業に出払ってしまっていて、村に残るは小さな子供と女性たちばかり。私は何のためにこんな遠くまでやってきたのか。がっくりしてしまったものの、村は興味深いものであふれていた。目を惹いたのがユニークな木彫りの像で飾られたお墓である。シンプルで味わい深い顔立ちをした像もあれば、カラフルなものもあり、それぞれとても個性的で、村の大王さんの愛情を感じる作品たちであった。当初の目的のイケメンには会うことができなかったが、独特の文化や、赤土の大地と深い森、見たこともないような青い空に魅せられた私は、以後何度かこの地に足を運ぶことになる。ラタナキリ州は先住民が人口の過半数を占める、カンボジアのなかでも特異な地域である。なお、トンブオ

結婚式の宴会で壺酒を飲む
人たち。壺から出ているス
トローを使って飲む

あるジャライ族の村の風景



トンブオン族の墓地。夫婦そろって埋葬されている



ン族は、若干彫りの深い顔立ちをしているように見受けられたが、もちろん、「イケメン」とは知人の主観的判断に基づく表現であることをお断りしておく。

プノンペンから六〇〇キロ以上離れたこの地域に住む先住民の人々は、今もシャーマンを介して精霊の意思に耳を傾ける生活を送っている。二〇〇七年初めに不思議な事件が起きた。一九年間行方不明だった女性、ひょっこり森から村に帰ってきたのだという。国内外のメディアがこの「ジャングル少女」に注目した。家族は言う。「精霊が怒ってしまったので、彼女を森に連れ去ったようだ。最近、ようやくその怒りが解いたので、家に戻ってくる事ができた。」水牛に乗って遊ぶのが大好きだったという少女は、言葉を失ってしまった。彼女の証言を得ることはできないが、シャーマンのお告げこそが真実に思えてしまうような、そんな雰囲気を感じた深い森が広がっている。

しかし、内戦が長く続いたカンボジアでは、先住民もまたその波乱の歴史と無縁ではいられなかった。一九六〇年代以降、ポル・ポト派に取り込まれた人たちがいたり、ベトナムに逃れた人たちもあったという。また、ホーチミンルートに隣接するこの地域には、いまなお米軍の不発弾が多く眠る。あるクルン族の村では「私たちは森のなかで闘っていた。敵をやっつけるためにあちこちに落とし穴を作っていたんだけど、

家の屋根や壁に使う木の葉を編む男性



軒先でタバコを吸う老女。先住民はタバコ好きが多い



収穫したカシューナッツを運ぶ人



米をつく女性たち

それにはまって死んでしまった仲間もいたな。俺の脚には今も銃弾が入っているぞ」とおじさんが豪快に笑う。何千年もの歴史のなかでは、有為転変は人の世の常とばかり、厳しい歴史を経てきたにもかかわらず、みな一様に過去を笑いながら話してくれる。さて、現代に生きる彼らの暮らしを紹介しよう。乾季のあいだは、のんびりと過ごしていた男衆も、雨季（五〜一〇月頃）の聲が聞こえてくるころになると、少しずつ仕事モードに変わっていく。農地は、山道を数日歩いた先にあるということもざらである。このために、私が冒頭で紹介したような出来事が起きる。四〜五月はカシューナッツの収穫の季節だ。カシューナッツは、一九九〇年代に栽培が始まったもので、今では貴重な現金収入源である。人々は、中古のバイクに三〇〇キロ以上の袋を載せて、仲買人のいるバンルンまで運ぶ。五月になれば農作業も本格化する。彼らは、伝統的に焼き畑農業を行っており、カシューナッツ以外の作物は一定範囲を転々と移動して耕してつくる。ほかに、森のなかで小動物を捕まえてくることもある。昔は銃をつかっていたようだが、いまは銃が禁止されているので手製のパチンコをつかう。近くに川があれば、そこで魚をとったりもする。

彼らには、周辺国の先住民と違って、きらびやかな民族衣装がない。民族衣装や織物の文化は存在していたが、戦乱と貧困のなかでほとんどが潰えてしまった。人々は

セサン川を渡し、学校に通う子供たち



セサン川の風景



開発が進むゴムプランテーション

たいてい、普通のシャツを身に着けるか、そうでなければ上半身裸である。もちろん「何を着るのも各自の自由だ」という意見もある。それにしても、プノンペンでみるラタナキリ州の観光ポスターで微笑む色白な女性の民族衣装風の装いと、実際の先住民の姿のギャップは大きい。

ラタナキリ州の森、川、空を眺めていると、すべてが永久不変のもののように感じなくなる。しかし、不可逆的な大きな変化の波がこの地域を覆おうとしている。近年、立派な舗装道路が建設され、プノンペンから一〇時間程度でたどりつけるようになった。道沿いには大型のゴムプランテーション開発が相次いでいる。発電用ダムも建設された。これらのおかげで地域経済が活性化し、人々の保健・衛生状況や就学状況は大幅に改善してきた。ただし、これまで先住民が使ってきた土地は外部からやってきた人たちの新たな開発の対象となり、彼らの土地利用習慣との衝突や土地の所有権をめぐる争いが頻発している。彼らの生活が向上することは不可欠であるし、時代にあわせて生活が変わっていくことは不可避であるが、一方で、彼らの守ってきたものがすべてなくなってしまうとしたら、カンボジアにとっても大きな損失である。開発と環境の両立、文化的多様性の保護といった基本的な課題があらためて問われている。

(はつかの なおみ／アジア経済研究所東南アジアⅡ研究グループ)